

2000年(平成12年)1月18日(火曜日)

現地の住民らとも知り合い、多くの友情が芽
生えた



提起

二十八年前の夏、私は台湾の山の中で仕事を手伝いながら現地の部族の家族と一緒に一ヶ月を過ごした。日本を出発する前、その家族に台湾再訪問の手紙を出した。折り返し、八十歳になるお父さんから、「とにかく来い。皆待っている」という電話が入った。

下山後、目指す家の近くで歩み出でた。お母さんは玄関口で、「ここ何日から、「とにかく来い。皆待っている」という電話が入った。

も玄関口で、「ここ何日から、「とにかく来い。皆待っている」という電話が入った。お母さんは玄関口で、「ここ何日から、「とにかく来い。皆待っている」という電話が入った。

落ち着かなかつたよ」とほほ笑んでいた。美人三姉妹も仕事を切り上げて駆けつけてくれた。帰郷のような思いだった。

「吉澤者」と言つたんだよ、ここでは。皆元気で頑たつにも、気持ちよく、自

持ちつ持たれつの旅

共生を目指して 〈台湾・玉山登山行〉

△下

丈そうだし、問題ないね。お父さんはそう言うと、ケラケラ笑っていた。国际政治の舞台で、台湾の位置は微妙だが、世界中の頭微鏡的に優しい山川があり、くつろげる家族と家と職人がいる。このせいで話になつたお父さんが笑顔まで林さんに車で送つてもうとすると、優かしや、世話を、私はしみじみとかみ

然に受け入れてもらえた。一般的には、障害者が職を保持するのは困難が伴う。彼らの眞の実力を知らず、国の助成制度の活用にしづくみする事業主、法律や規則だけで現実を解釈し、よりどころなく問題を抱えてしまつた人間の方に目を向ける。い人たち、一部の倫理を失つてしまつた福祉に携わる関係者も、いずれも問題だ。

彼らの旅は、われわれに

まつた福祉に携わる関係者も、いずれも問題だ。

彼らの旅は、われわれに

さまざまな問題を突き付けている気がする。われわれの感受性とセンスが、不斷に問われ、試されていると感じた旅だった。